

地域共生社会の実現に向けた地域包括ケアシステムの進展 ～認知症とともに生きるまちづくりを通して～



医療法人 静光園 白川病院 医療連携室長
猿渡 進平

saru@shirakawa.or.jp

本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

本日、お話したいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

医療機関で働くSWとして本人や家族から聞く声。

【本人の声】

- ・家の様子が気になるので自宅を見に行きたい。
- ・仏壇に線香をあげるのが、私の役割。
- ・子どもたちとの思い出が詰まった家に帰りたい。
→ 自宅に退院したい。

【家族の声】

- ・心配なので自宅への退院は考えていない。
- ・自宅に帰ってきてても、対応できる人がいない。
- ・近隣住民に迷惑をかけたので、施設を検討している。
→ 自宅に帰ってきてもらうと困る。

👉 結果、施設に退院せざるをえない患者さんが多い。

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

●認知症SOSネットワーク模擬訓練 SINCE 2004 との出会い

1. 認知症の人と家族を支え、見守る地域の意識を高め**認知症の理解**を促進していく
2. 高齢者を隣近所、地域ぐるみ、多職種協働により可能な限り、声かけ、見守り、保護していく**実効性の高いしくみ**の充実
3. 認知症になっても安心して暮らせるために、「**安心して外出できる町**」を目指していく



○各小学校校区での実行委員会の設立

実行委員会メンバー（校区によってメンバーは異なる）

- 民生委員・児童委員協議会
- 校区町内公民館連絡協議会
- 校区社会福祉協議会
- 地域の医療、介護事業所(事務局)
- 地域包括支援センター
- 認知症ライフサポート研究会運営委員
- 大牟田市 福祉課

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

第1回 白川校区 認知症SOSネットワーク模擬訓練



開催日：平成19年9月23日(日)

参加者：9名

外出役：1名

訓練結果：2時間歩き1件の声掛け

実行委員を中心に事務局に集合し開会式（認知症サポーター養成講座・声掛けの方法・道に迷った方を見つけた際の連絡先等）を実施。

その後に、外出役に対し、声をかける。

*連絡網無し。啓発メイン。

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

現在までの認知症SOSネットワーク模擬訓練の参加者状況

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度 (2回)
外出役	1名	6名	20名	26名	26名	26名	26名	50名	26名	13名
参加者	9名	87名	240名	165名	167名	162名	185名	232名	192名	202名
声かけ	1件	35件	361件	247件	268件	317件	299件	492件	304件	151件



□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

・退院前の担当者会議の場面



□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

・ 行方不明後の支援会議



本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

□ 実践からの違和感

- ・ 模擬訓練当初から校区の代表者として活動してきた住民の声

○ 模擬訓練の目的である“啓発”と“連絡網(セーフティーネット)”の整備、そして、その活用ができるようになることを目的に14年間取り組んできた。その結果、多くの住民が活動に参加するようになり「地域の中での体制」が構築できつつある。

熱心に「認知症の人を支えましょう」と言い続けてきた結果だと考えている。

○ 一方では懐疑的になっていることもある。

長年、この訓練に携わってきた人が認知症になり、閉じこもりがちになっている。これは「認知症になっても安心して外出できる」という目的とは逆の結果である。

○ 私自身に置き換えてみると、認知症になったら「恥」をかきたくないので自宅に引きこもるだろう。

自分の中の認知症像が「それ」であるとすれば、多くの住民も「そう」である。訓練が「それ」を作ってきたのかもしれない。

【事例Ⅰ】

80台の女性が行方不明になる。

情報が流れ、凡そ2時間後に本人発見。夫が警察に迎えに来て自宅に帰ることができた。地域包括支援センターや地域住民は、本人を見守るための体制会議を実施し、定期的な見守りを行うようになる。

その1週間後、本人は施設へ入所する。

【事例Ⅱ】

「認知症の人を支えるための訓練」を毎年実施。

中心的な立場で活動されていた住民が認知症となる。それ知った周りの住民は積極的に気遣いを行う。本人はそれに憤慨し、外出をしなくなり引っ越した。

私たちは、

「誰のため」に「何のため」に活動をしてきたのか

本人の声を聴く ことを起点に

本日、お話したいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

□ 認知症とともに生きる街づくりとは

認知症の本人同士のミーティング



情報について



- ・情報が無くて不安になる。
- ・インターネットは使えず、本屋には本が少ない。
- ・図書館では見つけることが出来なかった。

認知症にやさしい図書館 & 博物館プロジェクト



買い物について



- ・ 買い物が不自由。
- ・ レジのところで待たれるのが辛い。
- ・ 下に置いてあるものが取りにくい。

認知症にやさしいショッピングモール



社会参加や働く

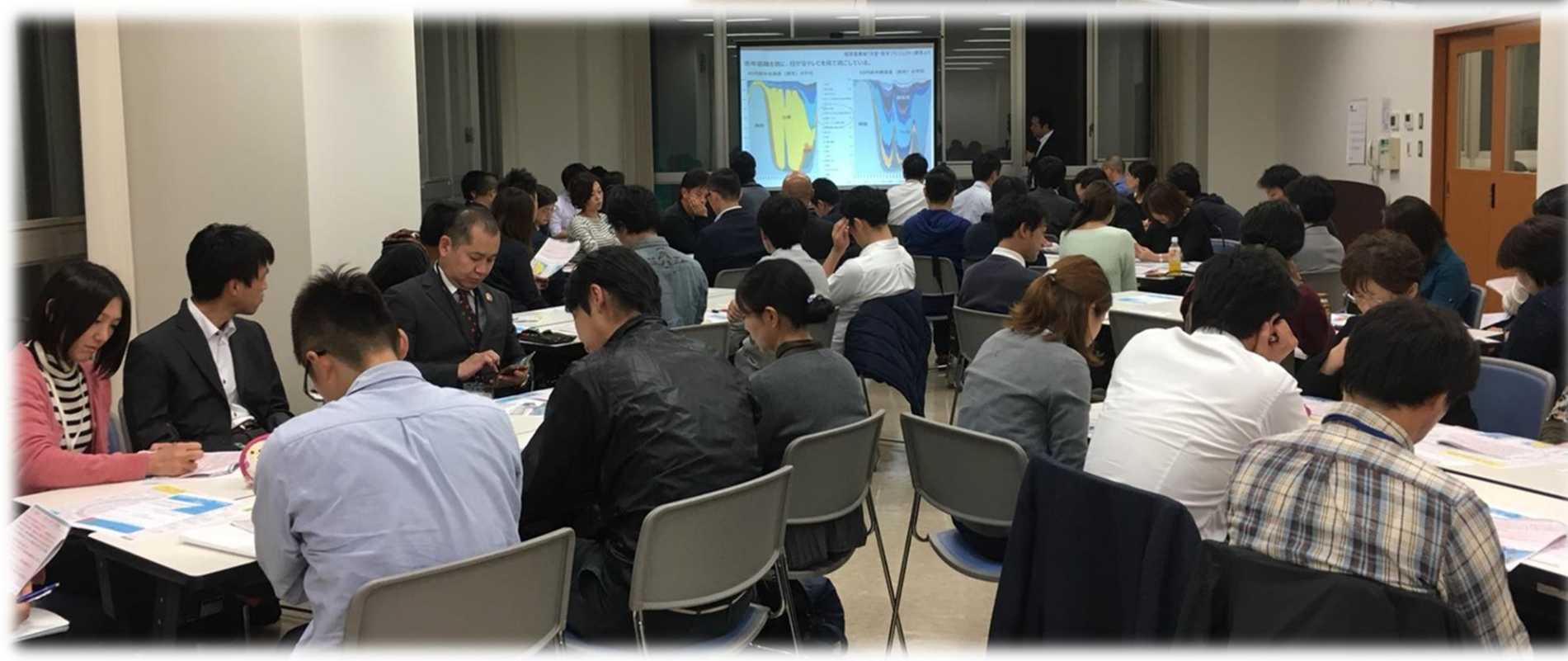


- まだまだ身体を動かしたい。
- 物忘れはあるけど、何かに貢献したい。
- 働きたいけど、普通の仕事（常勤）は難しい。

認知症の人の就労や社会参画WS



- ・ 企業関係者
- ・ 高齢福祉関係者
- ・ 行政関係者



新たな社会支援の創出に



洗車作業に取り組み施設利用者たち

要介護高齢者 生き生きと

大牟田内のデイサービス利用者が、市内の養老事業所で生き生きと働く姿が見られている。仕事に汗を流しているのは要介護の高齢者たちで、働くことで価値を手にする。現役の時よりかはるかに、自分たちも、またまた社会つながって役に立つことができるといふ思いが自信につながり、日々の生活にも張りが出てきているという。高齢者にとって、働くことが新たな生きがいになっている。

この取り組みは、同市 掛けつなげを企画する健康福祉推進室健康長寿支援課を中心として、地域共生を旨とし、新たな社会支援の創出を目的に行われている。これまで事業所と福祉施設に呼びかけ、

大牟田市内のデイサービス利用者が、市内の養老事業所で生き生きと働く姿が見られている。仕事に汗を流しているのは要介護の高齢者たちで、働くことで価値を手にする。現役の時よりかはるかに、自分たちも、またまた社会つながって役に立つことができるといふ思いが自信につながり、日々の生活にも張りが出てきているという。高齢者にとって、働くことが新たな生きがいになっている。

この取り組みは、同市 掛けつなげを企画する健康福祉推進室健康長寿支援課を中心として、地域共生を旨とし、新たな社会支援の創出を目的に行われている。これまで事業所と福祉施設に呼びかけ、

要介護高齢者 生き生きと



なもの。事業所側は労働力の確保と社会貢献、高齢者側は社会のつながりと生きがい創出というメリットがそれぞれある。何より、わずかながら、誰に気兼ねすることなく使える、とてもうれし」と。

▽ △ ホンダカーズ大牟田北手帳店では週に4日、リ

事業所が軽作業提供

市担当課呼び掛けで

大牟田

デイ利用者ら1時間程度

大牟田が、誰に気兼ねすることなく使える、とてもうれし」と。

▽ △ ホンダカーズ大牟田北手帳店では週に4日、リ

現在、同店で働いているのは要介護1、2などの高齢者。2月末から練習を行い、正式に3月から働かされた。最初は1時間かけて1台を仕上げるとも難しかったが、今はその洗車を完了するところまでという。

同施設を運営する森健一朗さんは「最初は戸惑いもありました。本日に

なり、日常生活の活動性も上がっていますと驚きを隠さない。

高齢者たちは、働くことで「また自分たちはやれることがある」と自信を持つようになり、できなくなっていたことで「チャレンジする姿勢も見え」といふ。

元運転手だった坂本喜さん(66)は「施設の中でレクリエーションをするのめいがか、やっぱり働くのは楽しい」と笑顔を見せる。さらに「最初は足がついていかなかったこともありましたが、やってみると、つをつかみ、効率も上がってきました。これからも働きたい」と話した。

市健康福祉推進室長の池田武俊さんは「社会性が低下すると、生活機能も衰える。今回のように働くことで社会つながり、自信を取り戻し、生活能力を回復させるのは自立支援にもつながる。高齢者だけでなく、社会的に孤立している人は多い。この取り組みがさまざまな分野で自立支援のきっかけになれば」と大きな期待を寄せている。(小柳 聡)

配送業と介護サービス事業所の連携による配送の形

広報

人と人をつなぎ、このまちをもっと好きになる

おおむた

Omuta City Public Relations

7.1

July 2019 | No.1238



89歳、障害があっても
元気に配達します

大牟田市に関する、さまざまな出来事を写真とともに紹介します。

まちかどレポート

本市の認知症などの取り組みが、また一歩前へ

ヤマト運輸(株)と福祉施設の「てつお」と「ライズ」が協力・連携し、福祉サービスを利用している人が配送業務を行う取り組みが進められています。高次脳機能障害のある89歳の女性は、今年の2月から週に一回、配送業務を開始。毎回、20通程度のダイレクトメールを、職員と一緒に徒歩で施設周辺を配ります。地域の人から励ましの声を掛けられたりするなど、顔の見えるいい関係ができています。また、何よりも本人のやりがいになっていて、「足腰は強いので、景色を見ながら楽しくやっています」と話しました。6月20日は手当の日で、施設の管理者から1月分の賃金が支払われ、周りの人から祝福の声がありがとうございました。

全国的に珍しい取り組みに、各地から注目が集まっています。



52 九州 28c 0 1/10k

大牟田 認知症患者がDM配達

朝日新聞 NEWS 2Z 大事

大牟田市 認知症患者らがDM配達

行政 × 宅配業者 × 介護施設

施設職員の介助を受けながら
徒歩でDMを配達

POINT

朝日新聞より

□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

- ・ 個人からの展開手段（専門職が活用するシート）

写真

氏名

呼ばれた名前

ふりがな

知る楽しさをもっと。

やりとり手帳

写真

氏名

呼ばれた名前

谷口 也

谷口 雄平

ふりがな

知る楽しさをもっと。

やりとり手帳

□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

- ・ 個人からの展開手段（専門職が活用するシート）

1-5 わたしの足あと

わたしの足あと

時代	時代	時代	時代	時代	時代
年	年	年	年	年	年

主なできごと

コメント

歴代の趣味とひとこと

伝えたいこと、メッセージなど

1-5 わたしの足あと

わたしの足あと

時代	時代	時代	時代	時代	時代
1950年	1960年	1960年	1970年	1980年	2000年

主なできごと

コメント

歴代の趣味とひとこと

伝えたいこと、メッセージなど

釣りに行きました

□ 認知症とともに生きる街づくりとは

古賀さんは、娘さんとの2人暮らしの80台の女性です。介護保険の認定は要支援2でした。

地域包括支援センターに勤務する竹下さんは前任者から引き継ぎを受け野田さんの介護予防支援計画の担当していました。介護保険のサービスはヘルパー（家事支援）とデイサービスです。

竹下さんは、「ご家族からも何の希望がないので、とりあえずこのままで。」と特に何も考えることなく、毎月の計画を立てていました。

やりとり手帳を実施して、本人は元々保育園の園長で、大牟田にある動物園は園児の引率で何十年間も通っており、また行きたいと思っていることが分かりました。

竹下さんは、思い切って本人と動物園に行きました。

本人はとても喜び「ここは、キリンがいたのに象がいる！」と、見たこともない表情で、とても嬉しそうに語ってくれました。いつもより足取りが良いように感じましたが、残念ながら途中で歩けなくなり野田さんは最後まで辿り着けずとても悔しかったです。竹下さんは、「これは高齢者であれば、どなたでもあることではないか」と思い、動物園の園長に事情を話をし、地元の家具屋さんのご協力のもと、ベンチを数台設置しました。



□ 認知症とともに生きる街づくりとは

・ 認知症当事者 100人インタビュー（個性の発信と事業の見直し）

80代・女性

無視されるのは嫌。お隣の人と仲良くしていきたい。

みんなから見守ってもらっている。

散歩するのは、学校の校庭。3周グルーッと回って帰ってくる。家が見えているから、迷わず、いつでも帰ることができる。

のんびり、幸せに生きたい。



70代・男性

認知症になっても変わらない。

近所の人と仲良くすることが必要。

楽しく明るく過ごすことが、認知症の進行を遅らせることになるんじゃないか。だから、みんなと話したいし、頼られたい、人の役に立ちたい。

困ったことより、嬉しかったことを聞かれたほうが嬉しい。困ったことは、思い出すのは辛い。



認知症と “とも” に生きる



For から With への転換